アルコール関連刺激への注意バイアスが 衝動的行動に及ぼす影響

○竹澤緑¹・浅見祐香¹・田中佑樹^{1,2}・野村和孝³・嶋田洋徳³

(¹早稲田大学大学院・²日本学術振興会特別研究員・³早稲田大学人間科学学術院)

キーワード：アルコール・注意バイアス・衝動的行動

The influence of attentional biases for alcohol related stimulus on impulsive behaviors.

Midori TAKESAWA¹, Yuka ASAMI¹, Yuki TANAKA^{1,2}, Kazutaka NOMURA³ and Hironori SHIMADA³

(¹ Graduate School, WASEDA Univ., ² Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science.,

³ Faculty of Human Sciences, WASEDA Univ.)

Key Words: Alcohol・Attentional bias・impulsive behaviors

目 的

多量飲酒を呈する者に対する伝統的な支援においては「断酒を継続すること」が介入目標とされている一方で、認知行動療法の枠組みからの理解においては、ハイリスク状況下において衝動的な飲酒行動を行う状態から脱却し、飲酒行動を適切に制御できること、すなわちセルフ・コントロールを向上させることを目標とすることが重要であると指摘されている(田中他, 2018)。このような多量飲酒を呈する者における衝動的行動は、アルコール関連刺激への注意バイアスによって生じていることが示唆されている(Weafer & Fillmore, 2012)。この注意バイアスには、刺激に対して自動的に注意が向く「自動処理段階」と、刺激から注意を離すことができない「統制処理段階」があることが知られており、このうち、統制処理段階の注意バイアスを低減させることが、治療において有効であると示唆されている(Schoenmakers et al., 2010)。しかしながら、統制処理段階の注意バイアスの低減によって、衝動的飲酒行動が改善されるかどうかは、必ずしも十分には明らかにされていない現状にある。そこで本研究においては、統制処理段階の注意バイアスの低減を目的とした注意バイアス修正訓練(以下、ABM とする)を用いたアルコール関連刺激への注意バイアス低減操作が、多量飲酒を呈する者における衝動的行動に及ぼす影響を検討することを目的とした。

方 法

研究参加者 問題飲酒指標 AUDIT 日本語版(廣・島, 1996)において、8点以上19点以下(多量飲酒と解釈される)の大学生および大学院生41名(女性26名, 男性15名, 平均年齢22.3±2.0歳)を対象に実験を行った。

測 度 (a)スクリーニング:問題飲酒指標 AUDIT 日本語版(廣・島, 1996), (b)自己制御:BIS/BAS尺度日本語版(高橋他, 2007)の下位尺度の1つであるBAS, (c)飲酒欲求:Visual Analogue Scales, (d)注意バイアス:ビジュアルブローブ課題(Field et al., 2004)における, 200ms(自動処理段階), 500ms, 2,000ms(統制処理段階)の注意バイアス得点, (e)セルフ・コントロール:修正ストップシグナル課題(Jones & Field, 2015)における, アルコール関連刺激へのエラー率を反応抑制の失敗の指標, アルコール関連刺激への脱抑制得点を反応抑制プロセスの指標として使用した。脱抑制得点が高いほど, アルコール関連刺激への反応を抑制するのに時間がかかることを意味する。

手続き preにおいて, (b)と(c)への回答を求め, その後(d)と(e)の認知課題を行った。認知課題の実施順序はカウンターバランスをとった。課題終了後, 2回目の(c)を測定した。次に, ABM群ではABMを実施した。postにおいて, 再度と(d)と(e)の認知課題を行った後, 3回目の(c)

を測定した。なお, 各認知課題の実施順序はカウンターバランスをとった。

倫理的配慮 本研究は「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された(2017-064)。

結 果

剰余変数として特性的な衝動性(BAS得点)を統制し, 注意バイアス得点の変化量と修正ストップシグナル課題の各尺度の変化量の偏相関分析を行った。その結果, 500msの注意バイアス得点の変化量と, 脱抑制得点の変化量とに正の相関が示された($r=.40, p<.05$)。この結果は, 統制処理段階の注意バイアスが高いほど, アルコールに対する反応抑制をするのに時間がかかっていることを意味する。一方で, エラー率とは有意な相関が認められなかった。この結果は, 反応抑制の有無のものには影響を与えていなかったことを意味する(Table)。

考 察

本研究の結果から, 統制処理段階の注意バイアスが高い(刺激から注意を離すことができない)ほど, アルコール関連刺激に曝された際における反応抑制が困難であることが示され, その結果として衝動的な行動選択が生じやすいことが考えられる。以上の結果から, 統制処理段階の注意バイアスを低減することによって, アルコール関連刺激に曝された際にも衝動的な行動選択がされにくくなると予測される。したがって, アルコール関連刺激への注意バイアス低減操作は, 多量飲酒を呈する者におけるセルフ・コントロールの改善に寄与できる可能性があると考えられる。

引用文献

- Schoenmakers, T. M., de Bruin, M., Lux, I. F. M., Goertz, A. G., Van Kerkhof, D. H. A. T., & Wiers, R. W. (2010). Clinical effectiveness of attentional bias modification training in abstinent alcoholic patients. *Drug and Alcohol Dependence*, 109, 30–36.
- Weafer, J., Fillmore, M.T. (2012). Alcohol-related stimuli reduce inhibitory control of behavior in drinkers. *Psychopharmacology*, 222, 489–498.

Table

注意バイアス得点と修正ストップシグナル課題におけるエラー率, および脱抑制得点の変化量の偏相関分析

	エラー率	脱抑制得点
200ms	-.22	.08
500ms	.12	.40*
2000ms	-.01	.32

* $p < .05$